宗像

毎月一日発行
発行所
宗像大社
宗像
福岡県宗像郡玄海町
電話玄海代③1311
定価一年送料共 1000円

神具、装束
結婚式場用品
株式会社 井筒
九州店
本社
福岡市市吉塚一丁目二番一号（〒八一二）
電話福岡（九二）六一五一～九四五六番
京都市下京区油小路六条北入（〒六〇〇）
電話京都（〇七五）三三一三四一（代）～四番
（〇七五）六六六番

宗像大社復興期成会

第二、第三宮復興に着手

当社責任役員会に報告

造営誌も来春刊行に

去る五月十三日、当社責任役員会が会議室に於て開催され、昭和四十八年度決算報告を始め重要議案が審議された。

昭和四十八年度歳入は、予算を上廻る順調な伸びを示したが、反面歳出については、昨年末以来の狂乱物価の影響を受け、大幅な出費の増大を余儀なくされた。しかし尚、全体的には収支の均衡を保って健全財政を維持し、社務本局海洋分局、文化財管理事務局共に歳入歳出決算の承認を受けた。

次いで次の諸議題について宮司より報告説明を行ない審議がなされた。

一、社内人事異動について

本局社務は現在、儀式、庶務、経理の三課に分れ、職員は夫々各課に配属されている。しかし、御造営事業のため多年に亘り殆んど異動を行わなかったが、今後は他課の仕事にも習熟させるため、五月十五日付を以って全面的な社内人事異動を行う、新体制は儀式課長宇都宮祢宜、経理課長蔓父祢宜、庶務課長楠本祢宜が夫々担当する。

一、第二宮、第三宮復興事業の件

懸案の第二宮、第三宮御復興については、先般宮司が上京し、出光復興期成会長に計画案を提出したが、その結果、総額一億一千万円と及び復興期成会による復興事業の推進が決定した。梅雨明けの七月には玄海町新庁舎が完成し、現在使用中の仮庁舎の明渡しを受けるので、直ちにこれを解体撤去し、跡地の造園整備を行って、来年六月には完成の予定である。

一、昭和造営誌の件

現在粗原稿を書き上げ、完全原稿とするための推敲を行っているが第二宮、第三宮復興事業も決定したので、更にこれを収録し、刊行は来春になる見込みである。

一、沖津宮現地大祭の件

例年全国より参拝団を募って斎行される同大祭は、本年は特に石油事情のため海上保安庁より巡視船の便宜供与が受けられないので、一般参拝は中止し、五月二十七日は宮司以下神社関係者だけが参道入口より御座船にて江口浜渡島して祭典を執り行う。

その他諸議案が審議され、正午過ぎ閉会した。

沖津宮現地大祭

神社関係者だけが渡島

玄海灘の真只中に浮ぶ筑前沖ノ島近辺で日露両国の国運をかけた日本海々戦が行われたのは、明治三十八年五月二十七日であった。

数えて今年がちょうど七十年目に当る。大社では毎年この日を下して海上保安庁の巡視船の便乗供与により一般参拝団の募集して沖津宮現地大祭を盛大に斎行している。

本年は既報のとおり海上保安庁第七管区保安本部より、「燃料事情が極めて窮迫、警備業務に支障を来たす虞れがあるため、巡視船による参拝団渡島の便宜供与は致しかねる」旨の通知があり、本年は神社関係者だけによる大祭斎行となった。

二十六日午後七時、中津宮拝殿に於いて出港前の宵宮祭が斎行された。昨年までは六、七十人もの参拝団が最終参拝申込を済ませ、翌日の無事渡島を祈っていたのだが、今年はちょっと寂しい宵宮祭であった。

翌二十七日午前五時、朝霧立こめる大島の波止場を漁船「海宝丸」は静かに出航した。乗船者は大祭奉仕の神職四名、氏子代表者五名、報道関係者一名の計十名である。

三時間を経過した頃、荘厳なたたずまいを見せる神秘の島"沖の島"に着島した。上陸後、直ちに金員「海水祓」を行い、心身を清めて御社殿に向ってうっそうと茂る原始林の奥へと続く急峻の小道を登りゆくとやがて山腹、巨岩にはさまれて木洩れ陽に美しく映える沖津宮御社殿に着く。八時三〇分、祭典開始、国家の安泰と海路の安全を祈念して葦津宮司の祝詞が奏上され、続いて各代表の玉串奉奠などがあり厳粛のうちに本年度の祭典を終了した。

（写真は沖ノ島での海水みそぎの模様）

初夏の訪れ"皐月祭"

新緑も目にしみる五月五日、恒例の"さつき祭"が斎行された。

神湊に鎮座の浜宮、江口に鎮座の皐月宮は中に釣川をはさんで古くから浜降りの神幸が行われていたが、この皐月祭りである。

両宮とも祭壇には、古式に則り赤飯、菖蒲酒、粽などが供えられ、この祭は古くは秋の放生会に対し"五月会"と呼ばれ、五社の神輿（第一、第二、第三、織幡、許麻）が釣川御前の浜（辺津宮東参道入口）より御座船にて江口浜まで神幸式を行うものであった。

浜宮境内は地元の人々が奉仕して美しく清掃され、子供相撲大会が行われるなど年々賑やかになっている。子供たちの拍手が一段と高く新緑の中にこだましていた。

引き続いて皐月宮で祭典が行われた。この皐月宮周辺の小高い丘は別名"カワラケ山"と呼ばれ、古い時代に祭に使用した神具土器などが散乱していて史跡としても価値ある処であるが、この近くまで自然破壊の波はおよせ、ブルトーザーにより削り取られた赤土が緑を変えている。目前に流れる釣川に映える山々、白き雲に、変わる事なき自然の尊さを教えられるようであった。

批孔運動と日本儒教（続）

論説

前述の所論に於いて、昨年中国で展開された人民革命路線による批林批孔の運動は、わが国の儒教に顕著な影響をもたらすものでないと結論づけたのであるが、孔子糾弾の反面に、焚書坑儒の暴虐で悪名高い秦始皇帝を擁護する言説があるので、批判の批判を加えなければなるまい。孔子を始祖とする儒教は、東洋倫理の精華として今も日本に生きており、これを敵視する苛酷な儒弾圧の秦皇を憎む思想も存在する以上、批判の批判は必要なことである。

道義的思想や宗教的信仰は、民族性を超越し国家意識を無視して、伝播信奉されるものである。故に儒教が中国に起り、孔子はじめその道統の儒者が中国人である点など問題でない。日本に渡来して日本人に信奉され来った儒教の歴史は、今日の日本人にとっては、貴重な民族遺産となっている。

孔孟思想の徳治主義と対立する老荘思想の虚無主義を弁護するなら、政治観社会観の相違と観察されるが、秦皇は焚書坑儒の暴君が定説であるのに、その坑儒に対する人民革命的弁護は納得しかねるのである。

幕末の朱子学派の儒者安積良斎は、霊峰富士を讃美した言絶句に、不老長寿の秘薬を探求して遠く海外まで使者を送った秦皇の非常識を、冷笑するの如く詠み込んでいる。苛政の邪魔者儒家を処刑し、自己の安泰延命のために狂奔する暴君に、民生の安寧福祉など念頭にあろうか。その弁護は批孔運動の一班としても、甚だおかしな議論である。然し、報道の奥に隠された中国指導層の何かの政治的意図に出た所論添加であるのかも知れない。

わが国に於ける儒教の歴史にも、道教仏教等との信仰思想の対立が、それぞれの支持勢力の政治的宗教的事情が絡んで表面化したことはあった。また同じ儒教の道流学統の中でも、派閥の分離対立による争排斥など行われた事実も首肯される。特に近世の朱子学と陽明学とは、多数の儒者が師説によってそのいずれかに属し、互いに攻撃論難した事例が挙げられるのである。然し、為政者の乱暴な弾圧や苛酷な処刑などは見られない。日本儒教史は、概して正常平穏に教義の精神を伝えて、今日なお国民生活の中に健在である。

禅譲放伐という革命事象は、中国に限った歴史ではない。西洋史の領域に於いても、遠くオリエント諸国家の成立以来、ギリシャからローマの統一を見て中世の諸国家成立の後、共和政ともなり君主政ともなって、政権の推移や政体の変動は繰り返されてきたのである。近世に至ってからも、顕著な革命戦乱は植民地の独立戦争まで数えると少くはない。フランス大革命、アメリカ合衆国の独立、ロシア革命、殊に世界大戦後の民族自決主義の台頭による被圧迫民族の自主国家樹立など、革命機運の発生は止る処を知らない観がある。

それらの原因を究明すると、宗教思想の反発は別としても、産業政策の不満、農民の経済的不利の排除、恐怖政治への反抗などを直接の動機とする場合が多く、稀には無血革命成功もあるが、現状打破の革命方式には流血の惨事を伴うのが常であった。

改革発生は、東西の革命史が教える如く永続するものではない。まして暴圧による恐怖政治の成功など一時的なものに過ぎない。秦皇の儒教抑圧による永遠の王朝も、一場の夢に終った。中国の現政権も、文化革命や批孔運動によって、人民共和国の根本的性格を、為政者奉仕の儒教的政治理念を排除して農村的人民的政治理念に基礎をおくものと、強調徹底したい方針のようである。従来の革命方式は、都市的部分的であったのに対し、現代の人民革命は農村的全民的の自主自発の方式だと高唱したいのである。然し、それは革命の発端から全人民的の自主方式などあり得ないことに気づく、革命成功の後に、人為的肉づけを施しているに過ぎないと言えよう。

ともあれ孔子が中国に始めた儒教も、日本に渡来して日本儒教となって今も生きている。長い歴史の流れの中に、わが国民の道徳観念を養い、あるいは信仰思想にもなって生きてきたのである。

批孔運動と銘うって儒教排斥に乗り出しても、それこそ中国の全人民的賛意は得られないであろう。その内に消えて新しい批判が台頭する時機もあろう。

阿蒙少言

教育の機会均等主義のお題目で、貧乏家庭の子弟が名門校から拒まれて問題化したのは昭和初年の頃。たしか成績優秀の深川辺の生徒が、お茶の水に志願して落第となった貧乏人排斥の内情を、読売が特ダネ記事にした記憶がある。

○現代はとて教師組合が許しもしない、抜群の素質と旺盛な意欲を持つ子弟を、その希望通りの学校に進ませて、有為の人材を育成することこそ最も肝要で、異論があろうこと請はないが、困るのは生来の劣等材を逸材なみにしたい親心である。人権と平等の名に於いて、教育ママは喧しい。○然し、どう教えてもどう練っても天分貧困では、均等の機会、平等の資格は知って社会愚を生む結果ともなる。猫も杓子も高等教育を結構だが、どうせ優勝劣敗の競争の世の中、素質実力ともに劣にも捧にもかからぬ者に、学士様の肩書だけを与えること自体が、寒心すべき悪平等不公平。○あ教師は嘆く「高校卒業という段階で、中学卒の学力があるかと疑われる生徒が、金の力が親の力か某私大に入学。四年経ったら難なく卒業。これが医者でなくてよかった」と。○医は仁術にあらず算術なりと悪口も聞かれる医者。人命にかかわる天職だけに、素質とそれに伴う実力は不可欠。医科大学の新設、医学部の増設が目立つ。○派度大学だった授業料さえ支払えれば、めでたく卒業は間違いない。それは奴人の肩書取りが目的だからと、うがったような観方、さてどうか。（白雲）

第三五回 宗像大社歌会詠草

毎月十五日〆切　詠草到着順

田久小方実
金婚の披露の席に寝たきりの妻も小さく来て座りたり

名残竹原圓
母の日に何か送りて来る知らせ老妻が電話に出でよとこべる

深田中野節子
夕かげり寒き十橋をゆく座頭の荒神祭りに琵琶を背負へり

物価高にゼネスト相つぐうつし代を老いてひそけく日々を生きおり

曲天野トモエ
孝恵の正助翁たたへて短歌会庭の牡丹の初花特ちぬ

田島吉武武雄
呑み過ぎて年甲斐もなくうたたねの母は息子に毛布着せおり

田熊鷲津かつ代
思はずす見舞ひ給ひしかの日よりそのみ言葉をむねにあたたむ

徳・重石松やす子
朝よりの雨に手先の痛み増し正助翁の咽に参れず

福岡桜井ツ子
童薬室の窓下に胡蝶花ひかり咲き五十年後のわが背戸に咲く

鐘崎村田四郎
手を出せば気楽にのり一文鳥もひなをかくしてきっと身がまう

福岡梶木州児
千早振る神世のよしのあかしそもみてくらしるき宝物の殿

武丸原田リノ
どの枝も切るにはおしき紅桃の光りふくらむをひと巡りしぬ

武丸原田まつ代
嫁く孫の荷物買ふべく大阪へ夜行の母と孫吾は見送る

日の里安部さつき
山間の日暮れは早く対岸車の連なるライト吾が目にいたし

大井吉田ますみ
亡き母のことつぎ〳〵と思はれて春の夜更のいねがたきかな

津屋崎内田久美
いつの日に風を防ぐとわからねど実生えし極の苗木植えおり

東郷藤崎辰子
秋理めし山茶花の種の生命を信じて今朝もに水やる

宮田片山一
兼会の通知葉書を刷り終へて雨降る径を投函にゆく

福岡江崎琴子
この桜こなたく愛でし人は逝きとどむるすべなく花を散りしく

小倉伊豆仁江
朝まだき朔日毎に郵便受けに神しば賜ふはかの媼君かも

吉留早川須磨
去年夫が若ねぎらいし鐘崎の浜べ頭ら来ぬ今日は母の日

津屋崎麦野時雄
移し植ゑ山藤の花庭に咲く春さ中の朝夕の色

田熊今村重刀
五月空重の音かろやかに踊て泳ぐ鯉幟かな

宮田片山朔子
汝が性の女の故か手を覆い泣くと早やも知りたるか裕紀子

武丸立石ろせ乃
木蓮の花の蕾を吹く風今年もたがわず花を散らしめ

津屋崎占部由久
去年の実をつけたるままにアカシヤの若葉繁りて花をつけゆく

原町八波五月
後添いとなりて早くも二年余梅ゆることなく今共に老ゆ

宗像中村幸
蕾のまま散る乙女椿のさみしさ射花とも云へぬ花を見とゞる

冨地原山田高野
母の日の贈物にとウインドーの中は其の日の品飾られし

宮田北原君子
ジャングルに住める人あるニュース聞きよみ返り来る我心むなし

田熊吉田直志
母の日をむかゆるたびに今はなき母につくせぬ心淋しく

千葉県栗山高秋
梅の白朝日に射てぞ咲きほこる死のとげき久留里城跡

福岡木梨よしの
去年まで赤き色冴え賑かな母の日なれど香華たむけむ

田熊力丸一郎
枯田過ぎくねる川土堤鳴路さん川面に影のゆれる夕暮

光岡岡北百合子
サマーセーター初にはおりて立座にあやめぬ気高しその濃紫に

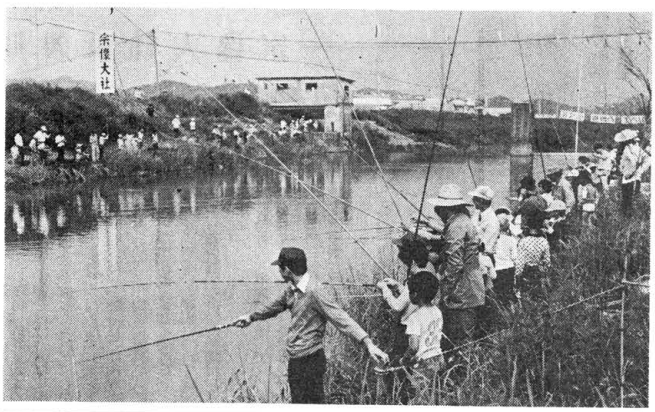
商工青壮年部東郷支部主催

子供釣り大会開かる

―子供達に楽しい一日をプレゼント―

「ワーッ！ヤッタゾ！」去る五月二十六日（日）の午前七時、朝もやの未ださめやらぬ東郷釣川の川べりに、時ならぬピッ子たちの歓声が上った。

この日は商工青壮年部東郷支部（支部長、占部浩一郎氏）主催による"子供魚釣り大会"の日。



日頃遊び場の少ない子供たちに楽しい一日をプレゼントしようと同支部が昨年から始めたもので、今回が二回目。

昨年も子ピッ子釣師の出現など大変な評判であったが、今年はこれを更に上回る大盛況。主催者側は、この大会の準備の為に長い準備期間を設け、更に十日間は追込み期間として釣川下流で網打ちしたり涙ぐましい努力。この大会に用意した魚、約千匹。この悪戦苦闘も「見て下さいこの子供達の喜びようを」に、全てが報われた感慨があった。

青少年育成に関する諸行事のなかで、大々的成果を収めたものと高く評価されているが、子供たちもこれを敏感に感じ取るものとみえて、同会員を大変喜んでいる。

この日も釣り上げる度に後をふりかえりニッコリ報告。子供達の歓喜あふれる光景の中に三時間の競技時間がたつ。今年の栄冠は作年のチャンピオン、宮部則秀君がいとめ、二年連続優勝した。

写真は当日の釣大会様

宗像大社の認識深まる

歴史家ぞくぞく来社

"海の正倉院"といわれる沖ノ島祭祀遺跡出土の諸神宝が脚光を浴びているのに加え、更に先号が紹介した「邪馬台国の秘密」を発刊された高木氏の影響あってか最近は特に歴史的問題の問い合せや、この種の来社が多くなった。

来訪者は、個人的には各地の郷土史家を始め、学生、学者と枚挙にいとまがない程であるが、団体としては各サークルや歴史とは関係のないような会の文化的活動の一端として来社から、郷土史研究会や九州博物館議会など専門機関の来社まで非常に幅が広い。

九州博物館協議会の来社と宝物館の拝館は始めてのことであったが、これだけ多くの国会があり、しかも各時代的に全てが一ケ所で拝観できるのは、めずらしいと感嘆の言葉がもらされ、今後の当宝物館当局の活動を大いに期待された。

又、郷土の歴史学者で、第一回沖ノ島学術調査の一員として当社に馴みの深い、原田大六氏が二日間に亘って来館された。

この度の来館は、氏が当館所蔵の阿弥陀経石の調査に取り組み、一冊の調査報告書を発行することになった為で、同経石の裏面と側面の、これまで解読されていない部分の調査報告が斯界でまとめられている。

この為に宗像古文書との引合せや綿密な調査がなされた。

この外、目立ってきたのは学生の来社で、特に大学生は各論の為の来社が多く、大社職員も神社史などの資料提供に大わらわとなってきている。

更に各研究会の一行への説明は欠かせないものであり、多人数の場合は職員がハンドマイクを持っての同行説明をしている。

こうした傾向に対処するため当社では、力々に満足いける案内や説明が出来る様、考えて行くことになった。

誓いも新らたに

―福山通運㈱福岡支店―

去る五月二十九日、福山通運㈱福岡支店七十数名が参拝、それぞれの運転車輌のお守りを戴いて拝殿に正座、敬虔な祈りを捧げた。この後代表者が次の通り誓詞を奉読した。

誓詞

私共、福山通運株式会社福岡支店集配車一同は、社訓を頂き、日夜日本経済の流通機構の一端を担い、社運発展に尽して居ります。然し乍ら反面に於て交通事情の複雑化、その他に依り事故の多発社会的責任追求をも誘発しかねない状態にて多大の迷惑を会社にかけているものと反省しています。爾今、我々一同は交通規則を遵守し社訓を守り、心をひきしめて事故を防ぎその責務を完うすべく、本日宗像神社の御前に固く誓います

福山通運㈱福岡支店
集配車一同

京都大徳寺管長が参拝

―当社文化財管理事業に感激―

去る五月一日、大徳寺管長以下一行十四名が参拝された。

色定法師一筆一切経は、全国の関係学者はもとより、僧籍の身をおく人々に至るまで一度は拝見したいと望んでおり、その方面ではかなり有名な経巻である。

管長は機会あることに拝見されているが、このたびは当地で行われる同宗派宗務会に出席のため来福されたもので、この機会を利用され大徳寺に籍をおく僧侶にも同経巻を一見させようと来社されたもの。

宝物館で一行は、沖ノ島の祭祀遺跡出土神宝をはじめ、数々の社宝に一々感心しながら拝観された。中でも特に阿弥陀経石及び一筆一切経などの仏教遺物拝観が主目的であるため、金見石を追いかけ検討されていた。この他全ての宝物がすばらしいとの感想で、当社の文化財管理事業に対し深い感銘を受けられた様子で、同管長は当天社に敬意を表されると共に感謝の辞をのべられた。

大徳寺は元応元年（一三一九年）約六五〇年前に、大燈国師宗峰が開山、一時衰退の時期を経て室町末期に名僧一休和尚、沢庵和尚の手により再建されている。（同寺略記による）

同寺は、宗像大社が管理している重要文化財色定法師一筆一切経の所有者である異聖寺の本山にあたる。

現在、臨済宗大徳寺派総本山。京都市北区紫野大徳寺町に位置する。

【お知らせ】

互選会に奮って参加を

宗像大社歌会の研修講座として設けられている互選会は益々盛んになっております。

この互選会はどなたでも出席できますし、仰木先生はじめ皆人で互選しあい研鑽してゆくためのもので、初心者も大歓迎です。

会費無用で資格等は問いませんので奮って御参加下さい。

漫筆明暗箱 (16)

へそまがり

すべて変な人、との老人評を聞くことはあるが、へそまがりは時代の流れが言語の部門におきかけている。字引によると、常識をはずれた性行または人を、へそまがりと言う。実際のお腐がどう曲っているかは問題でない。

へそまがりは老人に多い。特に退職閑居して、浮世の嬉な我儘の社会から離脱してから、組織の中の抑圧された自我が頭をもたげてきたのだろう。へそまがりに悪人はいない。悪料間では頑固を通せない。頭の柔ずた人に悪人はいないとの人生哲学は嘘である。

模範的へそまがりの傑物は、蜂の巣城に立籠って孤軍奮闘し、死に屈しなかった下笠ダムの室原老である。世間にも広く知られた多分反対の一致者であった。多額の私財を費して、ただ一人になっても最期まで兜をぬがない頑固者。それは純情家であり気骨者であっても、悪人ではやれない反抗児の戦いであった。

彼を怒らせ、へそまがりの長い戦いを挑ませたのは、法規を笠に着て高圧的に物言う役人根性である。早稲田大学を出た知識人、山岳部辺の老人と見びっての交渉に激怒したに違いない。

文化国家に民主主義だといっても、日本には官尊民卑のゆがんだ伝統は、極めて長く今日も残っている。その源泉を考えてみる。わが上代には、民族和合で温順な社会が展開し、官僚主義などはなかった。神話伝説に観る民族性は、役人根性を育てなかった。中世以前に遡って、大陸文化の影響によって発達した文物制度を掘り起す。唐朝の法制を模倣した律令政治、これが官僚主義を養ったと見られる。平安朝文化の精華とまでいわれる延喜式の制定、それが役所気質を植えたと思われる。

延喜式は律制模倣とはいえ、劃期的な改革で後世の規範となったが、武家政治になっても律令精神は受けつがれた。そして官僚主義権力主義が、種々の形で庶民の生活を圧迫し拘束したのである。各時代を通じて、それに堪え切れなくなって反発したのが、地方争乱争乱変動の史蹟資料ばかりが、歴史の遺産ではなくて、高尚なことは芸術作品、名もなき庶民の労作でも、それに数えられるものも残されている。大抵はへそまがりが多かった政治屋どもの組織を離れて、以前のさばさばした一匹狼に戻ると共に感謝の辞をのべられた。

蜂の巣城事件は、へそまがりの更新、政治改革は、多くは大勢力無血の反乱であった。史上の時代の台頭によって実現したが、無血に終ったものとはいえない。史上に大事件として残らぬ義人烈士の活動も、流血の悲劇に彩られなかったものは少い。

史蹟は貴重な歴史と遺産という。然し、政治や宗教に関係した争乱変動の史蹟資料ばかりが、歴史の遺産ではなくて、高尚なことは芸術作品、名もなき庶民の労作でも、それに数えられるものも残されている。大抵はへそまがりが多かったであろう。

へそまがりの性格解剖が、千年前の延喜式をときおろす破目となって、当時その編成に苦心した藤原時平等を憤らせるか知れぬ。また王政復古に伴走し律令の昔に還れと叫んだ江戸の国学者等に、ひどく叱られるかも知れない。役人根性の起源を平安に追求して、律令政治にケチをつけるより、もっと現実の政界昇に焦点をおけばよいと思う。出世主義から二都合主義となり、追従妥協偽装から舌職に落ちて、昨今は諸方に事件が頻発している。収賄検挙の連中に、へそまがりは居ない。根性まがりばかりである。

「おじろうとさんは黙って下さい」のくろうと政治屋どもの言い分に、あいそをつかして今東光氏は参院出馬をやめることにした。毒舌和尚で鳴らしたへそまがり、どろ沼に平気で生きられる強かな党人など居るのだろうか。疑う向きがあっては居ない。根性まがりばかりは参院出馬をやめることにした。

そして利権のために国家の運命を誤ることになったら、靖国の英霊は安らかに眠ってはおれない。

（落花生）

神のかなた

こうの湊 (40)

楠早鳥作
福田長庵画

嬰児　その五

藤原経光、伊予国今治附近の地頭の子として育ったが、度重なる争乱で父の出光が頭領を失い失意中に死んでいったのを見て海賊の海賊をかたらい二十五の年に宋との交易を始めた。その中に当な海商で、らちの明かぬ場合は海賊を働き次第に勢力を拡げ三十を半ばを過ぎ手下も十人近い集団となり朝鮮の沿岸を荒して金羅道の海浜に近い州郡は尽く吾物とした。

略奪した金穀は凡て船隊を組んで本国に送り瀬戸内海賊により売りさばかれていたが今年の夏頃より運搬の舟が対馬を出たあたりで消息を絶ってしまう。本国の状勢は凡そ知っているつもりだが、万一にも異変が生じたのではなかろうかと思うと寒気の襲来の前に帰国を決意し、全船団を蔚山沖に集結させた。どの舟も略奪品を満載し舟脚は重かったが旗差物をなびかせた大船団の出帆は壮観であった。船団は先頭に荷物を積載していない軽舟を十隻先頭に立て物見とし自らを中堅に置きその両側と殿軍に、特に装備の固い舟を五十隻配置し総勢百五十隻で堂々の陣型をつくり南下をした。その日の夕刻対馬の北端に到着し一夜を過し、主立った者を船に呼び、

「明日は、夜明けの潮に乗り一気に一言わず一まで着けろ、そこで一夜を過し寅刻（午前四時）出帆し満潮に乗って一気に赤間関の瀬戸を押し渡れ、この勢いを見れば大内の奴輩も手出しはすまい、さすれば後はわが庭の様な瀬戸内のこと、どこで泊ろうと勝手次第」と言った。翌日、北東の風に乗り予定通り一言わず一に着き風を逆けて島の南側に船団は投泊した。島は月に照らされて船に押しかぶさるように迫って見えた。経光は船の舳に立ち、

「一言わずーか」

とつぶやいて島を見り守った。この頭の子として育ったが、度重なる争乱で父の出光が頭領を失い失意中に死んでいったのを見て海賊の海賊をかたらい二十五の年に宋との交易を始めた。その中に当な海商で、らちの明かぬ場合は海賊を働き次第に勢力を拡げ三十を半ばを過ぎ手下も十人近い集団となり朝鮮の沿岸を荒して金羅道の海浜に近い州郡は尽く吾物とした。

略奪した金穀は凡て船隊を組んで本国に送り瀬戸内海賊により売りさばかれていたが今年の夏頃より運搬の舟が対馬を出たあたりで消息を絶ってしまう。本国の状勢は凡そ知っているつもりだが、万一にも異変が生じたのではなかろうかと思うと寒気の襲来の前に帰国を決意し、全船団を蔚山沖に集結させた。どの舟も略奪品を満載し舟脚は重かったが旗差物をなびかせた大船団の出帆は壮観であった。船団は先頭に荷物を積載していない軽舟を十隻先頭に立て物見とし自らを中堅に置きその両側と殿軍に、特に装備の固い舟を五十隻配置し総勢百五十隻で堂々の陣型をつくり南下をした。その日の夕刻対馬の北端に到着し一夜を過し、主立った者を船に呼び、

「明日は、夜明けの潮に乗り一気に一言わず一まで着けろ、そこで一夜を過し寅刻（午前四時）出帆し満潮に乗って一気に赤間関の瀬戸を押し渡れ、この勢いを見れば大内の奴輩も手出しはすまい、さすれば後はわが庭の様な瀬戸内のこと、どこで泊ろうと勝手次第」と言った。翌日、北東の風に乗り予定通り一言わず一に着き風を逆けて島の南側に船団は投泊した。島は月に照らされて船に押しかぶさるように迫って見えた。経光は船の舳に立ち、

「一言わずーか」

とつぶやいて島を見り守った。この頭の子として育ったが、度重なる争乱で父の出光が頭領を失い失意中に死んでいったのを見て海賊の海賊をかたらい二十五の年に宋との交易を始めた。その中に当な海商で、らちの明かぬ場合は海賊を働き次第に勢力を拡げ三十を半ばを過ぎ手下も十人近い集団となり朝鮮の沿岸を荒して金羅道の海浜に近い州郡は尽く吾物とした。

略奪した金穀は凡て船隊を組んで本国に送り瀬戸内海賊により売りさばかれていたが今年の夏頃より運搬の舟が対馬を出たあたりで消息を絶ってしまう。本国の状勢は凡そ知っているつもりだが、万一にも異変が生じたのではなかろうかと思うと寒気の襲来の前に帰国を決意し、全船団を蔚山沖に集結させた。どの舟も略奪品を満載し舟脚は重かったが旗差物をなびかせた大船団の出帆は壮観であった。船団は先頭に荷物を積載していない軽舟を十隻先頭に立て物見とし自らを中堅に置きその両側と殿軍に、特に装備の固い舟を五十隻配置し総勢百五十隻で堂々の陣型をつくり南下をした。その日の夕刻対馬の北端に到着し一夜を過し、主立った者を船に呼び、

「明日は、夜明けの潮に乗り一気に一言わず一まで着けろ、そこで一夜を過し寅刻（午前四時）出帆し満潮に乗って一気に赤間関の瀬戸を押し渡れ、この勢いを見れば大内の奴輩も手出しはすまい、さすれば後はわが庭の様な瀬戸内のこと、どこで泊ろうと勝手次第」と言った。翌日、北東の風に乗り予定通り一言わず一に着き風を逆けて島の南側に船団は投泊した。島は月に照らされて船に押しかぶ

泊承・寿永の昔、判官義経公の故知により立て策戦ゆえ敗ける事はない、各々勇めや」と叫んだ。先ず越智通秀の率いる三十隻の四船団は発進し、次いで氏俊自ら指揮する宗像水軍が大島と地島の境の魚長良瀬戸を渡った。正午、四船団は大島、長門義井島間北西十里の海域で倭寇と遭遇した。氏俊は遠賀郡脇田郷の沖合に停泊し、直ちに海峡入口の彦島南風泊に潜む串崎船団と早舟と兵船二十隻を廻航させ串崎船団百隻の中三十隻と合せて船隊を組み六連島北方海域に待機させるよう要請した。

経光は、積荷で舟脚の遅い船団にいら立ち、乍ら遅天を射かけてくる宗像の旗差物をなびかせている舟を追撃したが、申刻（午后四時）六連島南方の白島の沖合まで来て追撃を断念し外海から瀬戸内に入って潮に乗り一気に赤間関を押し渡ることを決意し法螺貝を吹かせるように六連の島影から船団が現れ退路を断つ型をとった。その時、今まで追われて逃げまどっていたかのように見えた宗像の水軍が向きをかえて迫ってくる。

―四にかかったが、俺した事が！経光の目から憤怒がほとばしった。戦は壮絶を極めたが倭寇の守りは固かった越智通秀は合図を発梧して矢を射るのを止めさせ兵を楯で覆った。倭寇の舟に憤付け敵舟に躍り込み斬り死をし堅陣を崩そう、そう思った時、舟底がぐんと重いものに押しげられた。潮が変った！彦島の影から大内の旗じるしをつけた串崎船が松明を満載し火をかけた火舟二十隻あまりを先頭に流れるように下ってくる。倭寇の船団が大きく崩れた。

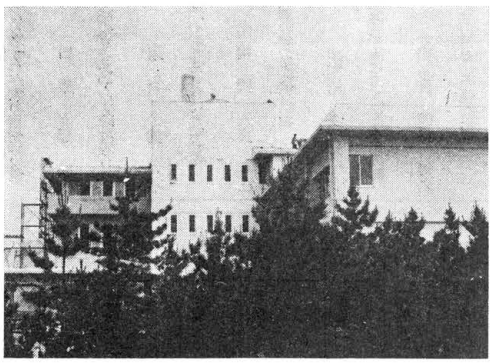
その時刻。すばるは女児を産んだ。

氏俊は直ちに舟手の将星を呼集し「かねての手筈通り戦え、赤間関の干潮は酉刻（午后六時）ぞ、

県立〝少年自然の家〟オープンは七月下旬

当郡玄海町の白砂青松の地に建設されている〝県立少年自然の家〟は、来る七月二十三日に予定されている待望のオープンを控え、工事が急ピッチに進められ最后の仕上げに入っている。

この〝少年自然の家〟（玄海の家）は、福岡県が玄海町江口浜の〝さつき松原〟の一角（約十五万平方㍍）国有林が三分の一、区有林が三分の二）に四季を通して研修と屋外勉強、自然に触れての体力増進を計ることにより、より一しおこころも出来る。



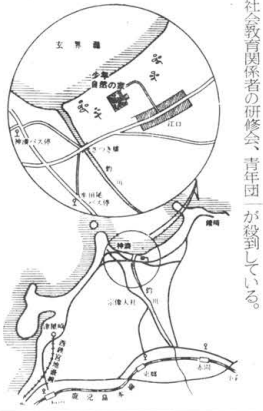
〝家の〟自然を〝みた〟写真は側面からみた

豊かな心を持った青少年を育成しようと昨年秋に五億六千万の予算で施工されたもの。

建物は鉄筋コンクリート地下一階、地上三階でベット数二百床。宿泊施設の他にキャンプ場などを設け、風光明美な自然環境の中で自用に勉強やスポーツを楽しむことが出来る。

又周辺には、名所（鎮国寺、宗像大社）や多くの史跡があり、実地での歴史勉強と共に動植物に親しむことも出来る。

自然の家を利用出来るのは、原則として小学生から中学生までとなっているが、空いている時は子供会ボーイ・ガールスカウト、社会教育関係者の研修会、青年団婦人会、老人クラブなどの団体にも幅広く提供できるように考慮されている。料金はジュース代百円、三食弁当千円、合計八百七十円で利用出来る。



県は、六月一日、地元、玄海町江口公民館内に〝自然の家〟仮事務所を設け、申し込み等の受付を行っているが、早くも地元小・中学生始め、県内各地より申し込みが殺到している。

話題の新車をみる (六)

ニュー・スプリンターの巻

カローラとスプリンターが先頃同時にフルモデルチェンジされたのは周知の通りであろう。

両車は、旧型では共通のボディシェルを備えていたが、モデルチェンジによりスプリンターに独自のボディが与えられた結果、これまでのお添え物の立場から、今度は全く新しい若者向きとしての価値を携えたものに変身。そのためエーションは、一二〇〇・一四〇〇ccにDX・XL・ST。一六〇〇ccにXL・GSの車種をもち、これらの基本に4速・5速フロア・3速AT・2速ATが組合われる。旧型に比し寸法は全長全幅がそれぞれ四〇ミリ・九五ミリ大きく、全高が三五ミリ低くなり、空気抵抗の少ない精悍なスタイル。

エンジンの種類は3K・T型・ツイン・キャブのTB型・さらに2T・別格として2TG型のDOHC等々のエンジンがある。

T型・2T型の一四〇〇・一六〇〇はカローラ及びセリカ・シリーズから転用されたもの半球型燃焼室をもつOHVとしては珍しい存在でハイパワーは一定評のあるもので、トヨタ系では最新設計の高回転タイプの性格をもつ。

前回は新カローラの方に触れたので、今回は新スプリンターについて紹介だい。

新スプリンターは、大別して4ドア系「セダン」と2ドア系「クーペ」とに分けられる。

前者のセダンは、所謂ヨーロッパ調で旧型よりも豪華。そのバリエーションは、一二〇〇・一四〇〇ccにDX・XL・ST。一六〇〇ccにXL・GS・SR・トレノ・デラックス版のトレノGTの8種。トランスミッションの4速フロア・五速フロア・新採用の3速ATが組つ。

宗像大社菊花会役員会

〝国土に花を〟モットーに

宗像大社菊花会（連合会）では去る五月二十六日午前十一時から当大社会議室に於いて本年度の役員会が開かれ、当会運営問題や今秋開催の第四回西日本菊花展開催に関する件などが審議された。

その結果、運営面では同会の主目的である「国土に花を……」の主旨に基き、各会もしくは会員がもっと宗像大社菊花会を利用出来るようにしてゆくことになった。

具体的には菊花展開催期間に苗の交換、もしくは苗頒布の予約などが出来る様、その取扱い方法などを考える。また、より多くの人々が新たに菊作りを始められる様に働きかける発展的方法として、講習会等を開いてゆく。会員相互の連絡機関誌、技術指導書等を作成する様検討してゆく。役員が各部門別に諸役を分担し、機構を整備してゆくなどが決まり、これらについては今後の役員会の場で、詳細に詰って審議して軌道にのせることになった。

また、毎年秋に同会が開催してきた五月二十六日の菊花展も今年で四回目。益々充実し盛んになって、昨年より更に前進を目指しているが、この会場までには全般に亘っての予定数が各理事から提示される予定となった。

この為、菊花展開催の件に関しては、急ぐ問題として、専ら出品細則等の審議となり、昨年春の反省会に於いて一応話し合われていた諸問題が再審議され決定した。

この結果

今年から競技コーナーを別巡別審査で設け、新人からベテランに至る出品対象を出品しやすい方法を講じてゆく。

一、今年から切花展示を行う。

但し、当会では初めてのこころみである為、一応奉納花として取扱ってゆく。

一、各部門とも、組鉢出品が多くなったため、それ以外の出品花は前述の競技コーナー扱いとすなどが決定した。

その他、細部に亘っては多々変更があったが、大要は昨年ときほど変っていない。

会議後、当大社斎館に於いて、福岡市菊花会「筑紫理事長外三名の方をおもてなしての懇親会に移り、当会と同協会幹部との交流がなされ、菊作りの話しに花がさいた。

この席上、早速六月二十三日同協会幹部による講習会が当社清明殿で行われる運びとなるなど有意義な歓談が続いた。

＝大島村教育委員会＝

文化財・史跡調査行う

大島村教育委員会では、昭和四十八年度文化財事業として行なっていた遺跡の分布調査が、此の程終了した。これは福岡県教育庁文化課の事業計画の一環として補助金事業で行われたものである。

大島村は沖ノ島という最大の祭祀遺跡を有しており、行政面積では非常に狭い地域であるが、史跡の重要性からすると、他の地域と比較してあんら遜色がない。

また国の史跡指定地である沖・中両宮殿地や奥文化財指定の中津宮本殿等をはじめとする古代祭祀遺跡、古墳時代の貝塚、安倍宗任の墓地など、古代から中世にかけての様々な遺跡を有している。

今回の調査で判明したことは、急峻な山地の部に開けた平地に幾重にも各々の時代の生活が繰り返えされた跡がみられる事や、当初の遺跡が破壊されていながらも尚かつ各所で土器の散布地ならびに包含層を観ることが出来ることである。また辺津宮の周辺と同様に、沖津宮拝殿、御嶽宮裏等、各所に祭祀遺跡の跡もみられ、歴史の古さを随所しのぶことが出来るが、今回の調査でこれらを確認できたことを大きな成果としている。

同委員会では、今後これらの遺跡をいかに保護していくかということが重大な課題であるとして、その具体策と方法を検討して行く意向である。

大和民蔵氏の逝去を悼む

大島が生んだ逸材、大阪在・大倉振興㈱社長大和民蔵氏が、去る三月十四日、台湾で不慮の事故にあい逝去された。

葬儀は大阪自邸で執り行われたが、四十九日の法要は、去る五月六日、大島村の別邸にて遺族、旧友、村人など多くの人の参列のもとに、しめやかに執り行われた。

大和氏幼い頃に両親と別れ、小学校卒業まで大島で過し、その後は大工見習、単身上阪、苦学力行の末、製図学校卒業。日支事変勃発するや、渡満、事業に成功。やがてソ連軍の満州侵攻があって捕えられ、シベリヤで抑留生活。

帰国後は大阪で大倉振興㈱を設立。その卓越した識見と着実な経営手腕により、会社は年々発展を遂げ昨年は創立二十周年と新社屋の完成を見て、今後の氏の活躍が大いに期待されていた。

生前、氏は故郷大島をこよなく愛され、年に数回は来島して磯釣りや島の人々との歓談に時を過ごされ、大島の発展や宗像大社中津宮の神徳発揚に尽瘁された。

先年、同宮参籠殿再建を発起され、当大社が建設用地埋立造成を了えた為、その建設にかかるばかりになっていた。

大事な時に大事な方を失くしたが関係者一同、氏の遺志をつぎ一丸となって同殿を完成させることを霊前に誓い、氏のご冥福を心よりお祈りした。

佐藤市五郎さん逝く

日本海々戦を目撃した只一人の生証人として広く識られた佐藤市五郎氏が、去る五月十一日、大島村の自宅で逝去された。

氏は亨ノ沖ノ島の〝市五郎さん〟で親まれ、熱の入った〝スローンズローン〟の大砲音響を入れた日本海々戦目撃談は聞く人を魅了しきった。

市五郎さんは明治三十二年に大島に生れ、十七才の時に沖津宮の使夫として奉職。

その後は大正十二年から十二年間、警察官に奉職、筑邦銀行や野上鉱業所を歴職して、終戦と共に帰島、漁協に勤めるかたわら、荒廃した中津宮の復興に尽力された。

昭和二十九年の沖ノ島学術調査の折から嘱託員兼神職として沖ノ島に渡島、約十五年間奉職された後、高齢の為退職された。心からご冥福を祈りたい。

酒処

「黒田武士」醸造元

大里酒造株式会社の巻 (12)

今回は嘉穂郡嘉穂町大隈の九州男子の酒「黒田武士」醸造元大里酒造株式会社を紹介したい。

「黒田武士」は、遠賀川上流嘉麻川源流の良質の清水と同地山間部から穫れる酒造好適米に加えて、嘉穂盆地特有の寒冷な気候が発酵に微妙な変化を与えて醸造される。

大隈は地図を見るとちょうど福岡県の扇の要に当り、古くから交通の要所として栄えていたところである。天正年間黒田藩は、この地に筑前六城の一つ大隈益富城を築城し初代城主に後藤又兵衛基次を配した。この城跡は大里酒造の裏山にある。二代目城主母里太兵衛友信は黒田甘十二万石二十五騎の一人で、天正十八年正月（一五九〇）藩主黒田長政の使者として伊賀のため京都伏見の福島正則邸に赴き、名槍「日本号」を大酒の酒で呑み取って一躍天下にその名を馳せた剛勇、勝略、仁義の黒田武士であった。今日あまりにも有名になった筑前今様（黒田節）の主人公である。藩主長政公の信頼特に厚く、大将着用の水牛の槊半月の甲冑を賜わり、後藤又兵衛大阪入城の後を受け、慶長十二年大隈益富城主となり二万石を拝領し、晩年酒をこよなく愛し、慶長二十年齢六十七して没し当地麟翁寺に葬られた。この典型的な黒田武士、母里太兵衛友信に綾りのある大里酒造株式会社は昔から自家醸造酒に「黒田武士」の銘をつけ販売している。

現在も大隈は交通の便がよく近くに天神瀬、原鶴、杖立、日田温泉があり、この温泉観光客が大里酒造に立寄り、店先に陳列している小石原焼の陶器に入れた原酒を購い求める機会が多くなったという。

大里酒造では伝統の技法と最新技術を巧みに調和させ、つねに品質の向上をはかり、完備した最新の設備から銘酒を生み出している。

現社長大里司氏は若年のころより社会奉仕に心がけ、郡消防団長、町会議長、酒類販売組合初代会長、県酒造組合長、司法保護調停委員などの要職を歴任され、現在では社団法人日本食品衛生協会専務理事、同県協会長の要職につかれている。

今春は勲五等旭日章を拝受されている。

【お知らせ】

当大社中津宮で毎年行なっておりますます七夕揮毫会の要項が決定致しましたのでお知らせします。

第十九回 宗像大社中津宮七夕揮毫会

要項

一、応募資格　幼稚園々児・小学校児童・中学校生徒

一、課題

小学校	幼・一年	せみ
	二年	みやしろ
	三年	ながれ星
	四年	山上の星
	五年	文字の祖
	六年	白浜青松
中学校	一年	遠洋白波（楷書）
	二年	静夜新月（行書）
	三年	秋思詩篇（行書）

一、規定

(1)字詰行数は随意。

(2)和半紙（普通型）を使用。（規格半紙は不可）

(3)学年、氏名は自書のこと。

(4)校名は代筆、又は校印に可。

一、予選締切　七月五日（金曜日）

一、届先　宗像郡大島村　宗像大社中津宮七夕揮毫会　係

一、予選審査　七月六日（土曜日）

一、席上揮毫　七月二十二日（月曜日）

一、会場　小学校四年生以下は大島小学校。　五年生以上、中学生は大島中学校

一、参加料　二〇〇円

一、審査　当日、中津宮にて厳正審査の上、発表します。

一、表彰式　当日、午後四時から中津宮にて行います。

主催　宗像大社中津宮

大島村教育委員会

夕刊フクニチ新聞社

宗像大社歌会
俳句作品集（二三）

祭り来て次き次き廻る野天店　土穴　八尋　恒夫

鳥らしき影もゆれ居る柿若葉　小倉　伊豆　秀子

名を聞かば踊り手草と峡の径　大井　吉田ますみ

みどり増すわが家の春や母の愛　藤沢市　玄洋　子

春暁の夢さめやらず時計鳴る　田熊　安部　ゆき

神木の幹むらさきに若葉する　東京　小浦　太平

久闌の姉の筆淡花吹雪　福岡　入江　柳江

蒲公英や陽にほゝけたる馬の糞　津屋崎　菱花　女

英彦山宮登る石段若葉風　宗像　岡田　無名

新緑の中に一襞れ山つゝじ　宗像　安部　光洋

梅雨入りやひとり孤島の灯をともす　田島　早鳥

沖ノ島

Ⅱ　筑前宗像神社奉幣年表　(6)

西暦	年号	事項	備考
八五四	斉衡元	四月三日　伝燈大法師位智戒等を七道諸国名神社に遣して、般若経を転読し、民福を祈らしむ	文徳実録巻第六
八六五	貞観七	五月二十七日　五畿七道諸神の祝部に白丁を補するを停め、八位以上及び六十以上の人をもってこれに充てしむ	日本三代実録巻第十
八六六	貞観八	三月八日　大安寺僧伝燈法師位一如を遣し、筑前・豊前・豊後・肥前・肥後の諸神社に於て読経せしむ	日本三代実録巻第十二
八六六	貞観八	四月八日　応天門の炎上により五畿七道の諸社に奉幣せしむ	日本三代実録巻第十二
八六七	貞観十	六月二十八日　大和国城上郡宗像神社は封戸神田なきにより、筑前の祖神の封物を以て、神舎の修理料に充てしむ	類聚三代格一　寛平五年十月二十九日太政官符所引、貞観十年六月二十八日格
八七〇	貞観十二	二月十五日　従五位下行主殿権助大中臣朝臣国雄を遣わして、宗像大神他三社に奉幣し、新羅船入寇に対して鎮護を祈らしむ	日本三代実録巻第十七
八七七	元慶元	二月二十七日　陽成天皇の即位に依り、大中臣、斎部両氏の六位以下を五畿・七道諸国に遣わして、諸社に奉幣せしむ	日本三代実録巻第三十
八七八	元慶二	十二月二十四日　大宰府、新羅の凶賊、我が隙を窺ふとの託宣等を奏するに依り兵部少輔平季長を大宰府に遣わし、宗形大神等に奉幣せしむ	日本三代実録巻第三十一　巻第三十四
八八一	元慶五	三月二十六日　五畿七道諸国の諸神社の祝部・氏人をして本系帳を三年に一進せしむ	日本三代実録第三十九　類聚三代格一
八八四	元慶八	二月二十一日　光孝天皇の即位に依りて、大中臣氏人等を遣して、五畿七道諸国の名神に奉幣せしむ	日本三代実録第三十五　日本紀略　前篇二十
八八八	仁和四	二月二十五日　宇多天皇の即位によりて、五畿七道の諸社に奉幣す 十一月八日　火神賓使を発遣す	日本紀略　前篇二十 日本紀略　前篇二十
八九三	寛平五	正月十一日　怪異に依り、五畿七道諸国をして神社に奉幣せしむ	日本紀略　前篇二十
八九四	寛平六	四月十日　新羅賊来寇するに依り、大宰府管内の諸社に奉幣せしむ	日本紀略　前篇二十
八九七	寛平九	八月二十八日　五畿七道に使を遣して諸社に奉幣し、大霊会を行うべき由を奉告せしむ	日本紀略　後篇一 西宮記七裏書
八九八	昌泰元	八月二十三日　五畿七道の諸名神に神賓奉献の使者を発遣す	日本紀略　後篇一
九〇一	延喜元	二月四日　渚社に奉幣して、菅原道真の左遷を奉告す	日本紀略　後篇一
九〇八	延喜八	七月十二日　五畿七道諸国をして、名神宮社を奉幣して、雨を祈らしむ	日本紀略　後篇一

〔お知らせ〕

沖ノ島祭祀遺跡第3次調査概報「沖ノ島Ⅰ」「沖ノ島Ⅱ」の転載は、今月号をもって終了致しました。

次号より、文化財探訪及び宝物紹介など行っていきたいと思います。

二宮佐天茲主人
四島一二三伝
——原田種夫著——

中略

私の好きな言葉

父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信ジ恭倹、レオ持シ博愛衆ニ及ボシ学ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ広メ世務ヲ開ク

人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し、急ぐべからず、不自由を常と思えば不足なし、心に望み発っては困窮したる時を思い出すべし、堪忍は無事長久の基、怒は敵と思え、勝つことばかりを知りて負くることを知らざれば害その身に至る、己を責めて人を責むるな、及ばざるは過ぎたるより勝れり。

二宮佐天荘四島一二三

中略

第二十一章　社長就任の時代

昭和十一年の一月二十三日、全株主や全社員の熱心な要望によって、四島民は、取締役社長に就任した。四島民はさいしょから実質上の社長であったが、初代社長の広江氏の没後も決して社長に就任しなかったのである。それは、四島民の実を重んじて名利にとらわれない考え方によるものであった。後年、四島民は、三無執着主義ということを唱えている。

三無執着主義

一、名声に執着する勿れ
二、金銭に執着する勿れ
三、生命に執着する勿れ

ただし職務には、徹頭徹尾死に至るまで執着せよ。

これは四島民が永い人生経験の果てに辿りついた二つの思想であろう。こういう思想がすでに四島民の胸中にあって、社長という名の椅子に対してもほんとうは魅力などなかったのかも知れない。大きい会社よりも、実質的に良い会社をつくろうという念願で終始一貫したのであった。

四島社長はこうして生まれた。それに伴って速水取締役と小島新任取締役が常務取締役に就任した。この年の七月四日、四島氏一家は大濠の新宅へ移転した。七月四日はアメリカの独立記念日だから、氏は仕事を休む習慣であったが、とくにその日をえらんだ。その日は、三りんぼうであったけれども、そんなことにはこだわらなかった。もともとこの家の土地は前に書いた昭和二年三月二十五日から五月十五日までの五十日間、大濠公園で開催された、東亜勧業大博覧会の敷地の一部を氏が入札のときに坪二十五円で百五十坪ぐらい買っていたものであった。

翌年の一月二十六日、福岡商工会議所の議員の改選があって、会社の代表者として氏は出馬しなければならない立場にあったのである。闘うならば勝たねばならぬ。票を沢山集めないことには敗けてしまうのだ。会社としての面子もあるのだ。氏は一日に十里も歩いて百別訪問をし、そのため運動中に新調たばかりの靴をとうとうはき破ったくらいであった。その熱心な努力の甲斐があって、一位で当選することができたのである。氏は、百別訪問をして頼んだところに一々お礼にいった。土居町のある未亡人宅をたずねていくと、あいにく留守であったが、家人の話で、

「奥さんは、四島さんが当選されるようと愛宕さまに御願をかけていましたので、当選されたと聞きますと大へん喜んですぐお礼詣りにいったところですよ」という話であった。

渡辺通り二丁目の肉屋の主人は

「四島さん、あたなは十数回もわたしの家に見えましたよ。わたしは皆にそれをいって宣伝しておりました」

といった。何事によらず、やりかけたら捨身の努力を傾ける四島氏の側面を示しているようである。

「心身の限りをつくせ職務の上に捨身の努力なくして快福なし」

四島氏の格言の一つだが、これも亦、きびしく自分を規制する氏の哲学であろう。昭和十二年二月九日に福岡商工会議所の工業部副部長に就任、十四年三月七日、工業部長につき、十五年二月に代表者交替で速水氏と替って退任した。

一方、その時代はどうであったかを見ておかねばならぬが、国民は、即日内閣総辞職を断行し、その後、斎藤、岡田両内閣の外相だった郷土出身の広田弘毅が組閣に当り、三月九日、軍部の傀儡の広田内閣が出現した。この内閣は「庶政一新、国内の不安一掃」を標榜したが、要するに軍部監視の下に生まれたものであって、実権は軍部に握られてしまっていたのだから思うような政治ができるわけがなかった。はたして、広田内閣は、短命で、昭和十二年一月倒れ、二月に林銑十郎（もと陸相）の内閣が成立した。この内閣は、わずか四カ月であった。昭和十二年三連隊などの二千二名の青年将校である。氏は、戸別訪問をしていた、一四〇〇余名の下士官、兵を暗い谷間に追い込むような暗澹たるとした時代であった。昭和十一年の二月二十六日、世にいう二・二六事件というのが起って一世を震撼させた。二月二十六日の早暁、歩兵第一、第三連隊、近衛歩兵第をひきして反乱を起こした。これらの部隊は、首相、蔵相、内大臣、侍従長、教育総監の官、私邸を襲撃し、内大臣斎藤実、蔵相高橋是清、教育総監渡辺錠太郎を殺し、侍従長鈴木貫太郎に重傷をおわせた。元老西園寺と牧野前内大臣もねらったが不成功だった。岡田首相は即死と発表されたが、のちに秘書官の身代りで助かったことが知れた。

反乱軍は、首相官邸、国会議事堂、陸軍省、参謀本部をふくむ永田町一帯を占領し、川島陸相と交渉して要求を実現しようとした。要求とは、蹶起の趣旨を天聴に達すること、統制派の幹部の逮捕または免、ソ連を威圧のため荒木大将を関東軍司令官に任命することなどだった。この反乱事件は、二月二十六日の午後八時すぎ、かんたんな陸軍省発表があり、ラジオ、新聞、号外で国民にはじめて事件の勃発を知った。その後、軍発表の外の報道はすべて禁止され国民はつんぼ桟敷におかれた。二・二六の反乱が鎮圧された直後から、軍部は血なまぐさい事件の威圧と戒厳令の施行を背景に、政治的発言権を公然と要求した。戒厳令は七月まで解けず、言論、報道、集会の自由は極端に制限された。インフレの昂進によってくる生活の困難、戦争政策への不安がからんで、もはや、軍部の革新運動にいる期待は失われてしまったのだ。

あやうく生き残った岡田首相は、昭和十二年七月七日、北京西南郊の永定河にかかる盧溝橋近くで、夜間演習中の日本の中国駐屯軍の一部と、ここを警備していた中国第二十九軍の一部隊との間に衝突が起った。原因については、日本側は、中国側の射撃に応戦したのだと主張し、中国側では日本軍が中国兵営の近くで示威的な夜間演習をおこなうこと自体が不当だし、また中国軍がさきに発砲した事実はないと抗議した。

しかしこの小銃射撃が誰によってなされたとしても、戦闘開始については、日本軍の側に大きな無理があった。これが局地的に解決されずに、一挙に北支事変に、と拡大し、やがて、中国に対する全面的戦争へと発展していった。一枚の色紙を紙は、若人を戦場へ戦場へと送りつけた。巷のあちらこちらでは、出征兵士を送る万歳の声がとどろき渡るようになっていった。このようにして、わが国は、一歩一歩と悲劇へ接近をはじめたのであった。

第二十二章　日華事変の渦

日華事変は、政府や軍部では全面的な長期戦に拡大されるとは思ってもいなかった。大軍を送って強烈な一撃を与えれば中国は屈服すると甘く見ていた。昭和十二年十二月、北京でカイライ政権の中華民国臨時政府ができたので国民政府との和平交渉は困難となった。そこで昭和十三年一月十五、近衛首相は、「爾後国民政府を相手にせず」という声明を発表し、ついに、和平交渉の道を自らときしてしまった。

その前年の九月からやかましい国民精神総動員運動というのがはじまっていた。「八紘一宇」とかなどのスローガンのもとに、消費節約、貯蓄奨励、勤労奉仕、生活改善などを説いた。

岸行なった。とくに華北では一触即発のきわどい情勢がうまれていた。今にして思えば、昭和十一年の二月に起った、いわゆる二・二六事件という凶悪で血なまぐさい事件のあとの険悪な世相の影がまず消えずに尾をひいていて、暗い谷間が向うに望見されていたようだ。